

平安時代における川原寺の瓦生産

—軒平瓦の分析を中心に—

田中龍一

I はじめに

飛鳥の地に創建された川原寺は、天皇勅願の大寺院として威容を誇っていた。しかしながら、平城遷都後も移転することなく、地位の低下は避けられなかった。11世紀後半には東寺末寺として支配を受けることとなり、衰退の一途をたどったが、平安時代のうちに少なくとも二度の火災にあっていたことが文献から判明する。一度目は延久2年（1070）以前¹、二度目は建久2年（1191）ごろとされる²。このうち、一度目の火災にともなう埋納遺構と考えられているのが、川原寺裏山遺跡である。同遺跡からは被災した塼仏や塑像とともに承和昌宝（承和2年（835）年初鑄）が出土しており、同寺の別当・検校となった聖宝との関連から、9世紀代に火災がおこったとの見解がある³。

以上の被災と復興の履歴は、瓦からも確認できる。たとえば、今回対象とする平安時代の軒平瓦は、中心伽藍の調査において約200点出土しており、創建軒平瓦651型式（以下、「軒平瓦」、「型式」は省略し型式番号のみ表記する）の約330点にも引けを取らない⁴。平安時代に大規模な再建工事とそれに伴う瓦の生産がおこなわれたことは、疑いようもない事実であろう。しかしながら、平安時代の瓦に対しては、文様上類例に乏しいためか、十分な検討がおこなわれてきたとは言いがたい。

そこで本稿では、平安時代における川原寺の造瓦体制を解明するための一歩として、軒平瓦の再検討をおこなう。関連する他遺跡の瓦とも比較をおこない、大和国内の瓦生産・流通体制における川原寺の位置づけについても見通しを述べたい。

II 研究史と問題の所在

伽藍中枢部を発掘、報告した奈良国立文化財研究所学報第9冊『川原寺発掘調査報告』（以下、学報とする）によると、平安時代に位置づけられたのは軒丸瓦7型式、軒平瓦15型式である。これらを前期と後期に大別し、前者は「聖宝の川原寺に住した頃」として9世紀後半を、後者は軒丸瓦の文様から「型式的に興福寺の永承再建時の瓦のそれにわづかに先行するもの」、つまり11世紀前葉ごろを想定した⁵。



図1 范の違いに基づく型式の再検討

花谷浩は、新出型式を紹介しつつ川原寺出土軒瓦を概観し、他遺跡との同範・同文関係を指摘した⁶。また、飛鳥池遺跡出土の川原寺同範瓦を検討し、763・762の同範関係と改範状況を明らかにした⁷。

山崎信二は、南都七大寺を中心とした平安時代軒瓦を通時の検討するなかで、平安前期の川原寺にも言及した⁸。特に751が凸面押圧技法によるものであり、東大寺系の技術系譜に位置づけられると指摘した。

以上のように、川原寺出土の平安時代軒瓦に対しては個別の検討があるものの、それ自体に主眼を置いた分析は皆無である。各型式を再検討し、文様・技術のまとめや系統を明らかにしたうえで全体像を把握する必要があるだろう。再検討を進めるにあたり、既往の研究を踏まえて、まずは以下の検討課題を設定する。

- ①大和における奈良時代以来の技術系統に位置づけることが可能なのか否か
- ②川原寺への供給を主目的に生産・流通したのか否か

上記の課題に取り組むべく、本稿では軒丸瓦に比して型式数、出土量ともに多く、製作技術上の特徴を抽出しやすい軒平瓦を主な検討対象とする⁹。

III 軒平瓦の瓦当文様と製作技術

1 型式の再検討

軒平瓦各型式の検討に先立って、範の違いに基づいた型式を設定するべく再検討をおこなった。同範か異範かの判別方法については、

型式 学報	型式 本稿	瓦当文様	S=1/8	型式 学報	型式 本稿	瓦当文様	S=1/8
751				764			*
752				765 → 764			
755				771 → 771a			
756				784 → 771b			
761				781			*
763 → 763a				783			*
762 → 763b				785			

*は2個体を合成した3次元モデル

図2 川原寺における平安時代の軒平瓦型式一覧

範傷の比較に加え、Sfm-MVSによって作成した3次元モデルの位置合わせも試みた¹⁰（図1）。複数型式がひとつの型式にまとめられる場合は、改範前の型式番号に統一し、アルファベットで細分した。その結果、以下の検討を経て平安時代の軒平瓦は合計11型式となった（図2）。

（1）763・762→763a・763b

762・763の同範関係については、すでに花谷浩によって指摘されている。すなわち763の上外区を切り縮めたものが762である¹¹。なお改範時には、切り縮めにくわえ、内区上方に新たに珠文を配置している。本稿では改範前を763a、改範後

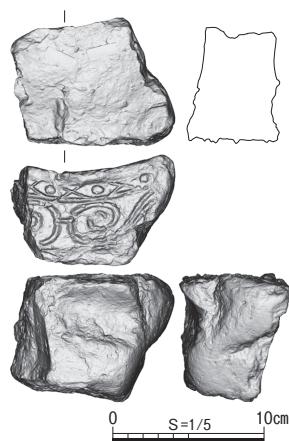


図3 765 展開図

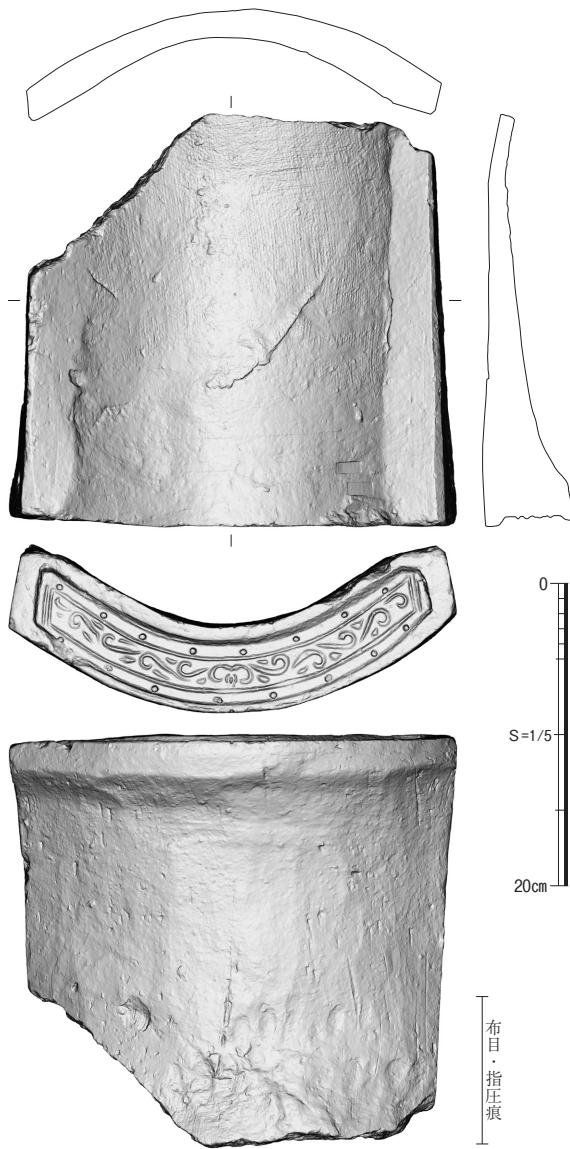


図4 751 展開図

区を彫り潰したものが、784にあたる。本稿では改範前を771a、改範後を771bとする。

2 軒平瓦各型式の検討

(1) 751 (図4)

瓦当文様 均整唐草文。上方で繋がった対向C字を中心飾りとする。左右には単位の離れた唐草が5回反転する。上・下外区には小ぶりな珠文を疎らに配置する。脇区には珠文を置かず、界線と平行する縦線を配する。

を763bとする。

(2) 764・765→764

765は、これまでに1点のみ出土している。学報掲載写真の傾きから、右端の破片として型式認定されたと考えられる¹²。しかし、現物を確認したところ、右側面は明瞭な平坦面も調整痕跡も認められないことから、摩滅した破面とみるべきであろう（図3）。さらに位置合わせの結果、765の文様は764の中心飾部分と完全に一致した。以上の点から、別型式と認定する根拠が失われたと判断できるため、本稿では764に統一する。

(3) 771・784→771a・771b

784もこれまでに1点のみ確認されている。外区に小ぶりな珠文を置き、内区は一段高い平坦面となっているが、唐草の痕跡のような突出が確認できる。珠文の大きさが同程度の771と位置合わせをおこなった結果、外区珠文の範傷が一致することに加え、界線と内区文様の痕跡も一致したため同範と認定した。771の最終段階で内

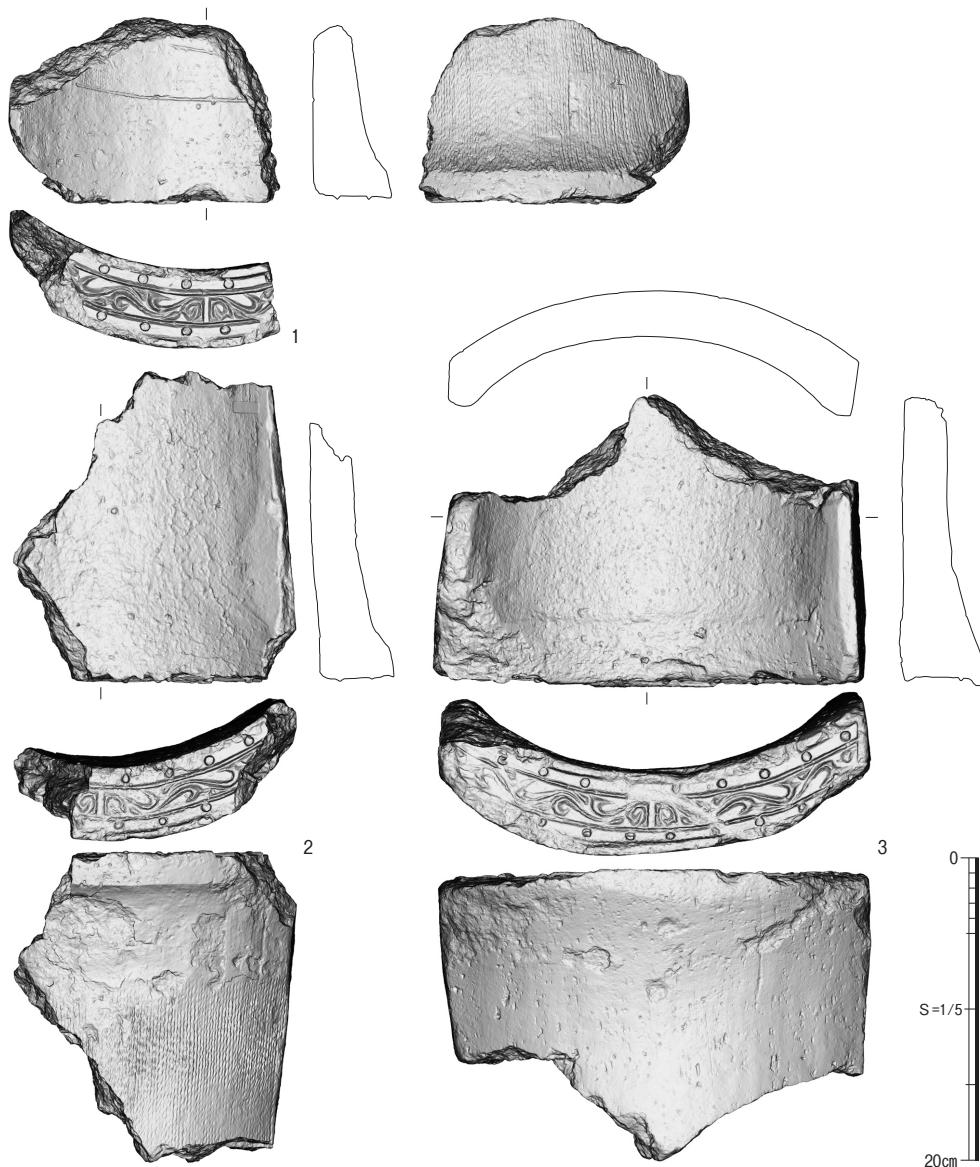


図 5 752 展開図

製作技術 凹面には布目痕が残り、一部個体で不定方向に走る粘土継ぎ目が確認できる。一方で糸切痕は認められることから、たたら切り出し¹³によらない粘土塊の使用が想定される。凸面には、頸部から平瓦部にかけて縦方向のヘラケズリをおこなう。ケズリは平瓦部の途中で終わる個体もあり、ケズリが及ばない部分には、指圧に起因する凹凸と布目痕が残る。

また、狭端部には凹面・凸面と連続する布目痕が残る。ケズリが不十分な個体には、凹面側縁部や側面にも布目痕が部分的に残る。以上の点から、751においては狭端面と側面

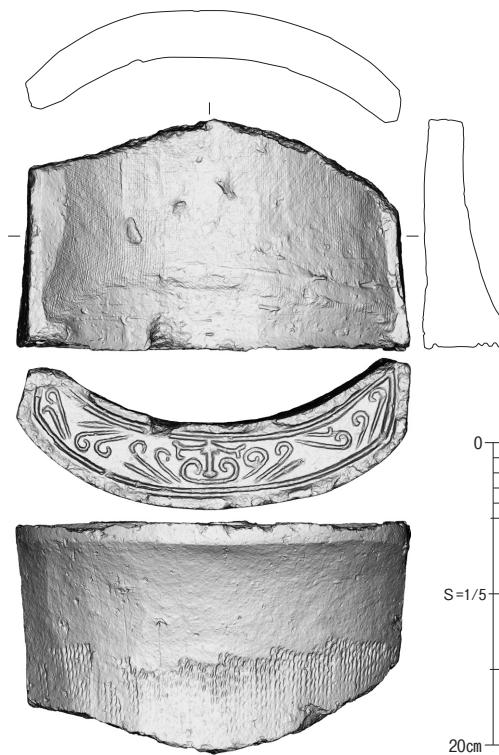


図 6 755 展開図

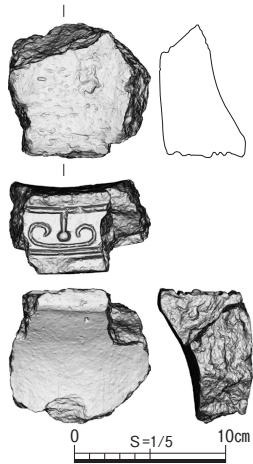


図 7 756 展開図

の三方に立ち上がりをもつ型枠状の成形台が使用されたと考えられる。これと関連して、平瓦部の中心軸上（いわゆる谷の部分）は、厚さ 1 cm 程度とかなり薄くなっている。特に狭端部に近づくほど顕著だが、薄い部分の凸面にも指圧痕・布目痕が残っている。以上のことから、型枠状成形台に粘土塊を押し広げて成形したことがわかり、典型的な型づくりと評価できる。顎形態は、2.0～2.5 cm の顎面をもつ曲線顎 II。範の形態は不明だが、幅広の周縁をもつ。

(2) 752 (図 5)

瓦当文様 均整唐草文。下向き C 字を並列する中心飾りを置く。左右には単位の離れた唐草が 5 回反転する。上・下外区には珠文を配するが、脇区は設けない。

製作技術 四面には布目痕と糸切痕が残り、たたら切り出しの粘土板を用いている。瓦当部の成形は、粘土板の凸面に粘土を貼り付けているが、剥離面は凹凸があり不明瞭なものである（以下、この成形方法を「凸面貼り付け成形 A」とする）。瓦当部成形後の凸面調整は、縄叩きの有無・範囲によって 3 種類がまとめられた。

- ① 顎部から平瓦部にかけて（ケズリ調整したのち）全面を縦縄叩きで仕上げる（1）。
- ② 顎部から平瓦部にかけてケズリ調整し、凸面を縦縄叩きで仕上げる（2）。
- ③ 顎部から平瓦部にかけてケズリ調整で仕上げる（叩きはおこなわない）（3）。

なお、①、②の叩き具の縄は比較的細かく密である。また①、②は幅 2 cm 前後の明瞭な顎面をもつ曲線顎 II だが、③は顎面をもたない曲線顎 I と直線顎が多数を占める。

(3) 755 (図 6)

瓦当文様 均整唐草文。中心飾りには、横長の上向き C 字形中心葉の中に先端が十字形

の垂飾りを置く。垂飾りの根元からは左右に唐草が伸び、先端で二股に分かれる。中心飾りの左右には単位の離れた唐草が3回反転するが、唐草の第二単位の展開は左右非対称である。外区は素文。

製作技術 凹面には糸切痕と布目痕がみられる（たたら切り出しの粘土板）。瓦当部の成形は、凸面貼り付け成形A。凸面は、顎部から平瓦部にかけて縦方向のヘラケズリをしたのち、平瓦部に縦方向の縄叩きをおこなう。約1.5cm幅の顎面をもつ曲線顎II。

(4) 756(図7)

瓦当文様 中心飾り部分のみ判明する。横長の上向きC字型中心葉の中に、先端が丸く膨らむ垂飾りを置く。外区は素文。

製作技術 1点のみ出土し、瓦当面から7センチ程度までが残存して

いる。凹面は幅7センチ以上を横ナデするが、一部に布目・糸切痕がみられる（たたら切り出し粘土板）。瓦当部の成形は、凸面貼り付け成形A。凸面は顎部までが残り、縦方向のヘラケズリをおこなう。顎面付近には幅1cm程度の横ナデが認められる。幅1.5cmの明瞭な顎面をもつ曲線顎II。

(5) 761(図8)

瓦当文様 均整唐草文。明確な中心飾りではなく、中心から左右に連続する唐草が4回反転する。外区・脇区には、珠文と×文を交互に配する。

製作技術 凹面には布目痕と糸切痕が残る（たたら切り出し粘土板）。瓦当部成形法は不明。凸面には、顎部から平瓦部にかけて縦ケズリをおこなったのち、全面を縄叩きする。顎面をもたない曲線顎Iが主体だが、曲線顎IIも少数認められる。

なお、凸面の顎部から平瓦部にかけての移行部分（特に両側面付近）で、凹型台の圧痕が残る個体が一定数存在する。凸面に離れ砂が撒かれる個体もあり、凹型台の使用に伴う

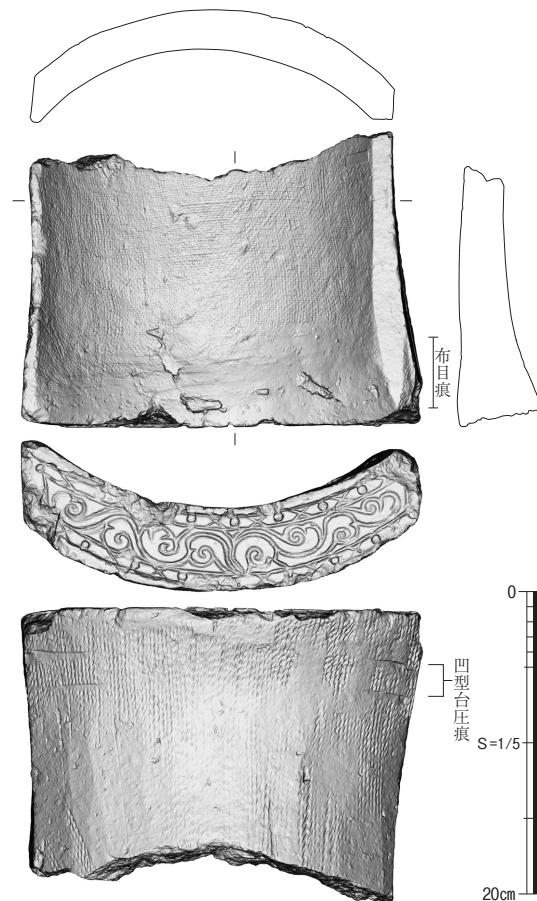


図8 761展開図

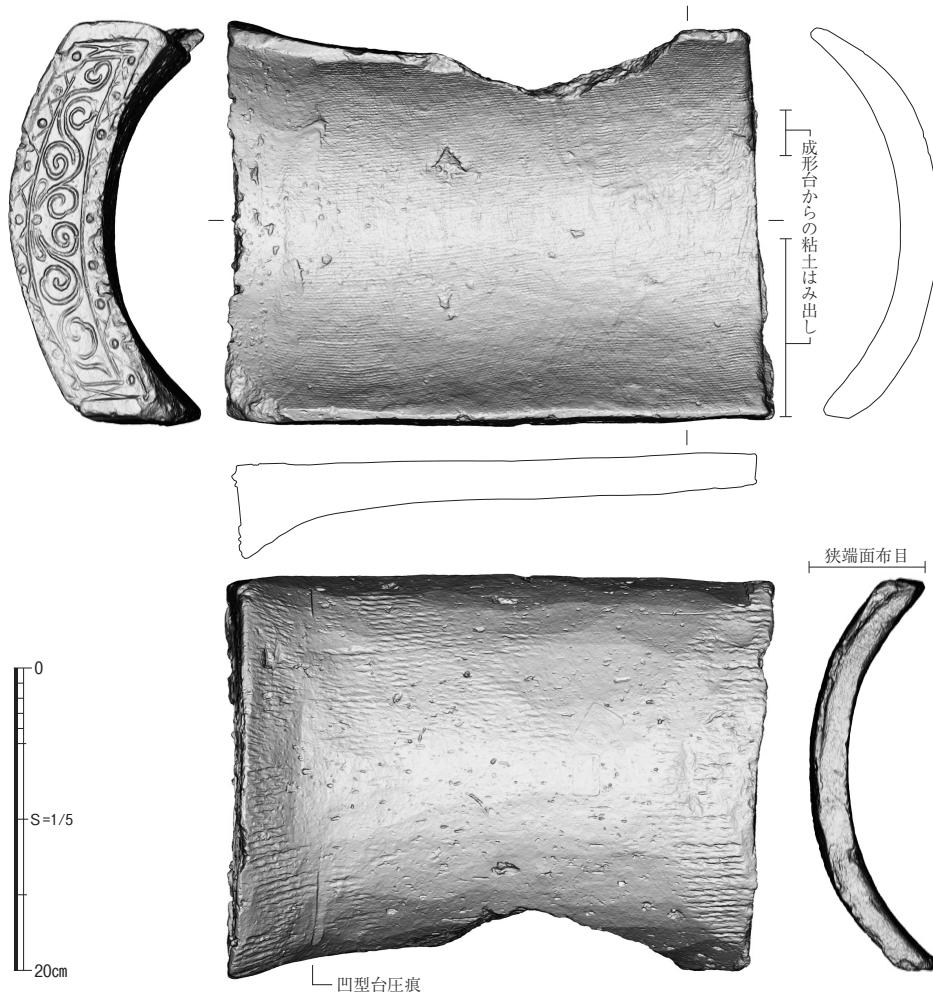


図9 763a展開図

ものだろう。また、側縁付近のケズリが及ばない部分に布目痕を残す個体も認められ、型枠状成形台を使用した可能性も指摘できる。

(6) 763a・763b (図9、10)

瓦当文様 均整唐草文。巻き込みの強い上向きC字形中心飾りを置き、唐草は向かって左に3回、右に2回反転する。外区には珠文と×文を交互に配する。脇区には、縦長の×文を一つ置く。

先述の通り、範の切り縮めをおこなった763bでは、上外区をなくして内区上方に珠文を新たに配置する。

製作技術 改范前後で製作技術に大きな変化は認められなかった。凹面には糸切痕と布目痕が残る（たたら切り出し粘土板）。瓦当部の成形は、凸面貼り付け成形A。凸面は、顎

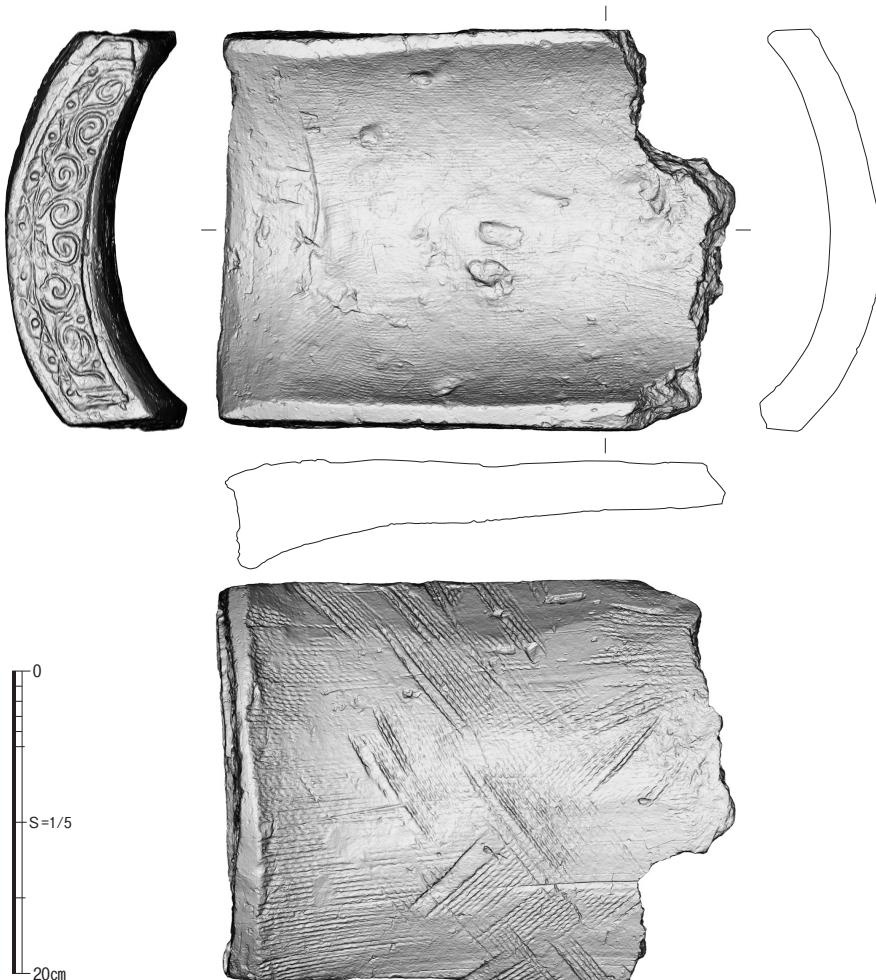


図10 763b展開図

部から平瓦部にかけて縦ヶズリをしたのち、全面を繩叩きして仕上げるものが大半だが、繩叩きを省略する。顎形態は曲線顎Ⅰ・Ⅱ、直線顎があり、個体差が大きい。

顎部～平瓦部の移行箇所には凹型台圧痕が残り、離れ砂の使用も認められる。加えて、狭端部まで残る事例をみると、凹面から狭端面に連続する布目と狭端面凸面側にバリ状の粘土のはみ出しが残り、型枠状成形台の使用が想定される。

(7) 764 (図11)

瓦当文様 均整唐草文。明確な中心飾りをもたない。左右から内側に展開する唐草が中心で横棒によって連結し、左右に向けては2回反転する。外区・脇区には珠文と×文を交互に配する。

製作技術 凹面は、全面をナデて布目をほとんど残さない。たら切り出しによるもの

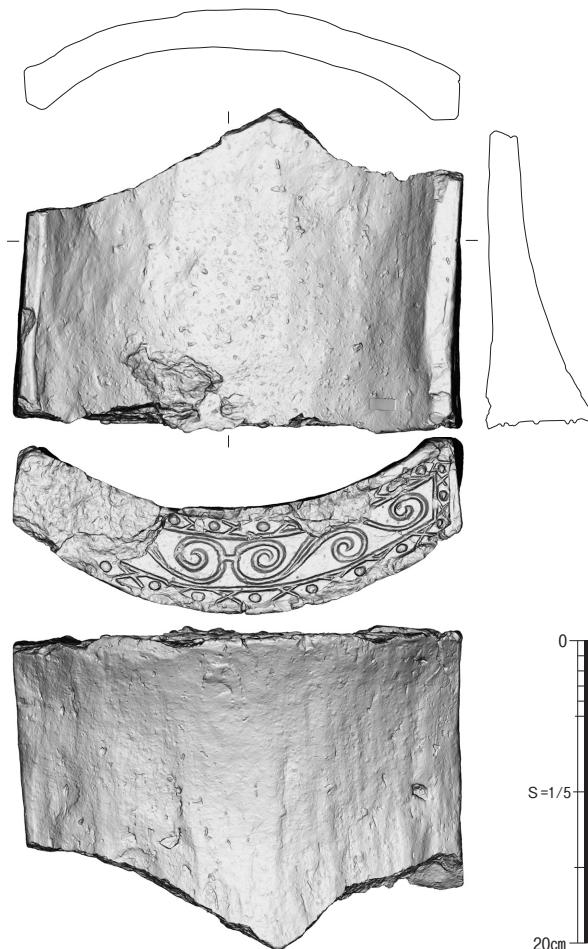


図11 764展開図

部の成形は、凸面貼り付け成形A。凸面は、顎部から平瓦部を縦ケズリしたのち、全面を繩叩きで仕上げる。顎形態は曲線顎I・IIが主体だが直線顎もあり、個体差が大きい。

狭端面には、凹面から連続する布目痕が残る。なお、側面と凹面の角部分が大きく飛び出す個体があり、凸型成形台から側面側に粘土がはみ出しが明らかである。両事象は一個体内で確認できたわけではないため判断が難しいが、狭端面のみ立ち上がりをもつ成形台を使用した可能性がある。

(9) 783 (図13)

瓦当文様 均整唐草文。中心飾りは対向C字をおき、宝珠状の文様でつなぐ。唐草は左右に緩やかに展開し、2回半反転する。界線は二重にめぐり、外区は素文。

製作技術 凹面には布目・糸切痕が残る（たら切り出し粘土板）。凸面は調整方法が二種類認められ、その他の技法・形態もそれぞれ異なっている。

かどうかは不明だが、平瓦部の厚みが均一であることから粘土板の使用が想定できる。瓦当部の成形は、凸面貼り付け成形A。凸面は縦方向の指ナデやケズリで仕上げ、繩叩きはおこなわない。ごくまれに、瓦当面に離れ砂をまく個体がある。顎形態は、曲線顎Iまたは直線顎で、顎面をつくりださない。

(8) 771a・771b (図12)

瓦当文様 均整唐草文。明確な中心飾りをもたない。左右の唐草は中心に向かって2回反転し、外側に向かって1回反転する。外区・脇区には小ぶりな珠文を配する。

製作技術 771bは1点のみの出土で凹凸面ともに残存せず、製作痕跡はほとんど観察できない。以下、771aの所見を記す。

凹面には、布目痕と糸切痕が残る（たら切り出し粘土板）。瓦当

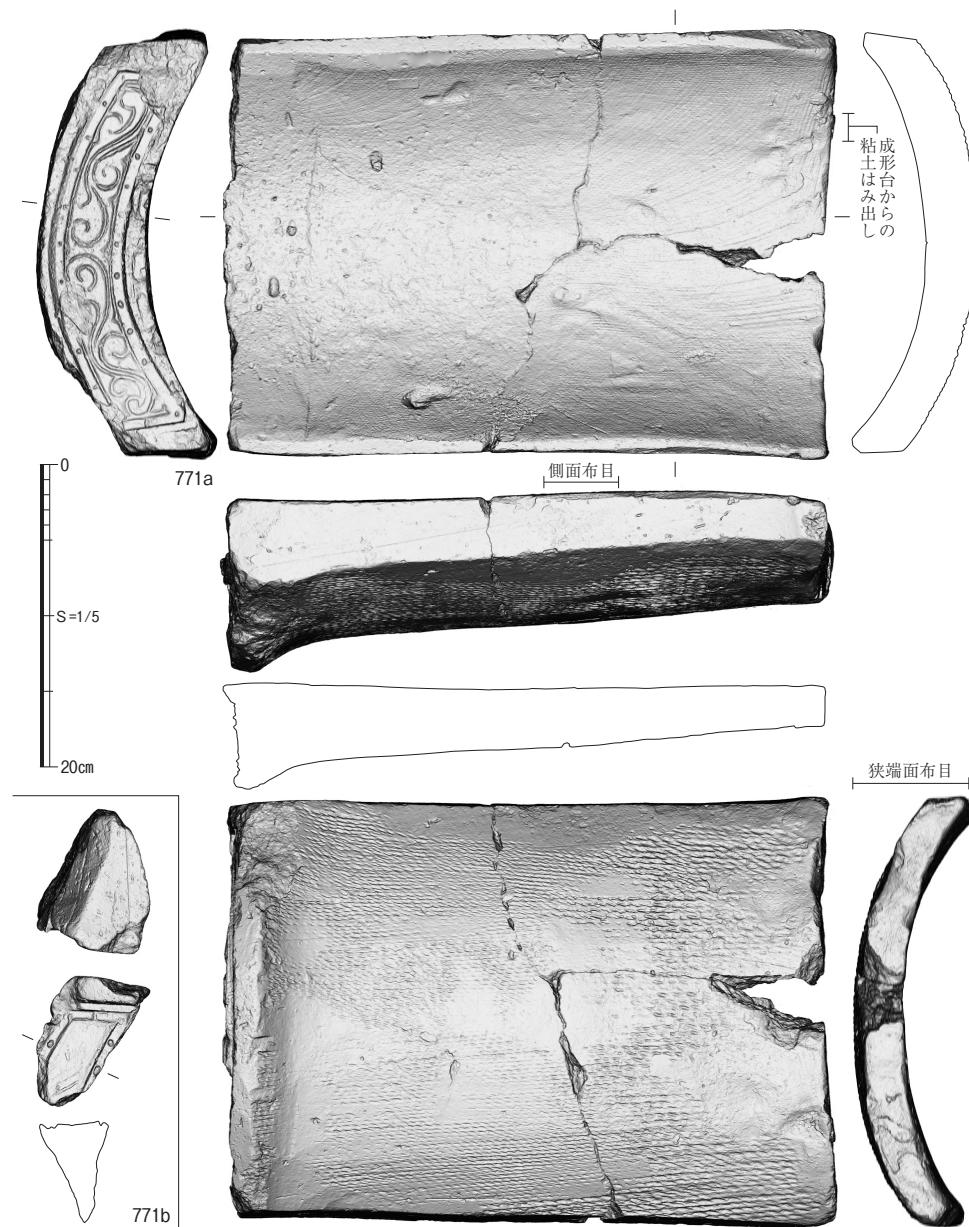


図12 771a・771b展開図

- ①頸部から凸面にかけて縦方向のヘラケズリ・ナデをおこなったのち、凸面を繩叩きで仕上げる。叩き具の繩が縦巻きのものと横巻きのものの二種類がある。頸形態は曲線頸II (1)。
- ②頸部から凸面にかけて縦ナデで仕上げる。凹面も全面ナデで仕上げる。頸形態は直線頸 (2)。

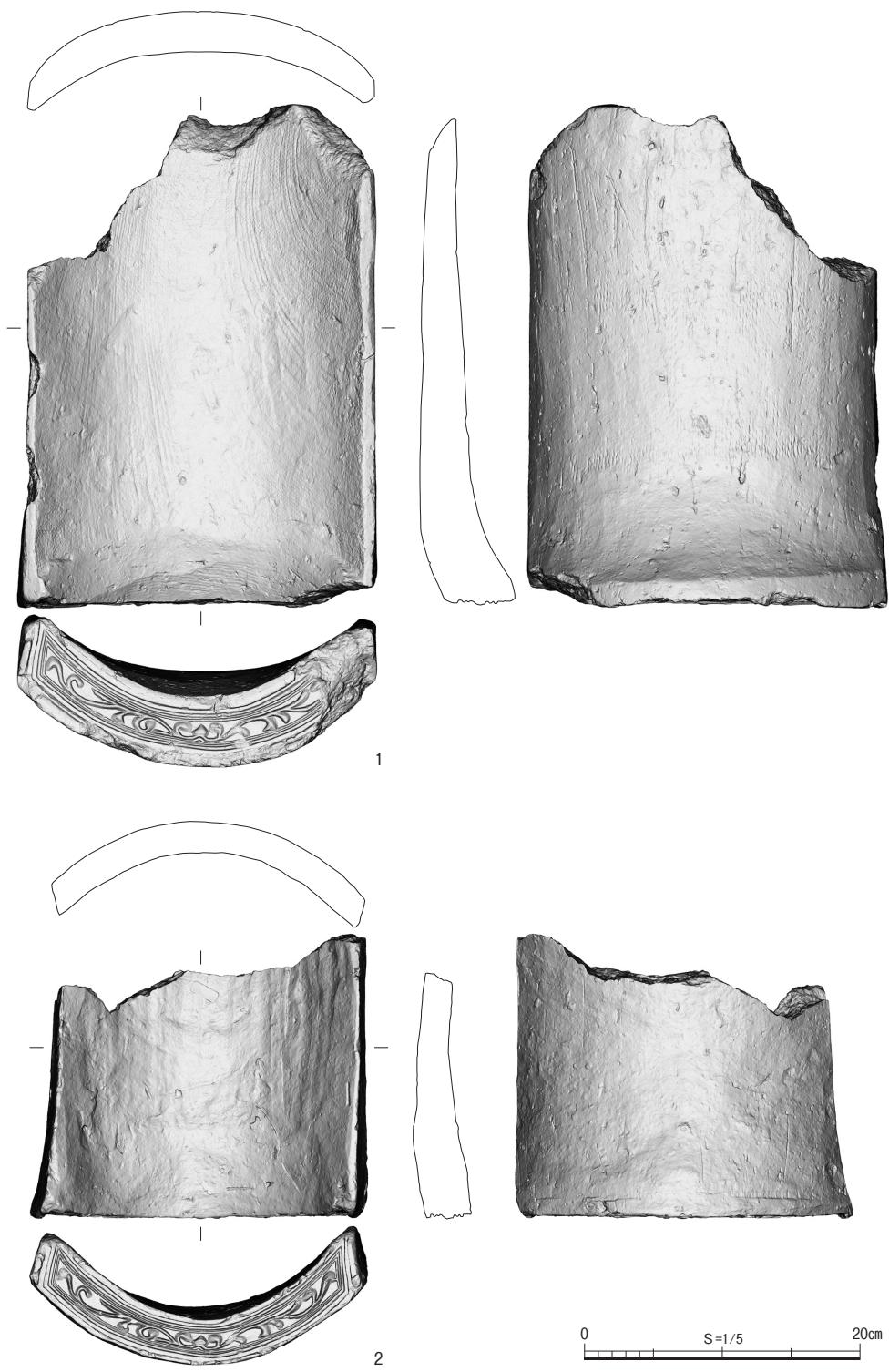


図13 783展開図

(10) 781 (図14)

瓦当文様 偏行唐草文。右端の部分が不明だが、複数個体から文様を復元したところ、左から右へ7回反転すると考えられる。界線がめぐるが外区は素文。

製作技術 凹面には、布目痕と糸切り痕が残る（たら切り出し粘土板）。瓦当部の成形は、平瓦部凸面に顎部粘土を貼り付けるが、その剥離面は明確な平坦面をなす（これを「凸面貼り付け成形B」とする）。顎部は剥離した資料が多いが、明確な顎面を持たず、緩やかに膨らむ曲線顎。顎部は横ナデ、凸面は縦ナデで仕上げる。

(11) 785 (図15)

瓦当文様 均整唐草文。中心飾りは側視花文か。唐草は左右に3回反転すると考えられる。外区はもたない。

製作技術 確認できたのは破片1点のみである。凹面には布目痕が残るが糸切痕は認められず、成形時の粘土素材は不明。凸面には離れ砂が撒かれ、縦長の縄目が数条確認できる。縄目が叩きにともなうものかは判然としない。顎形態は直線顎。

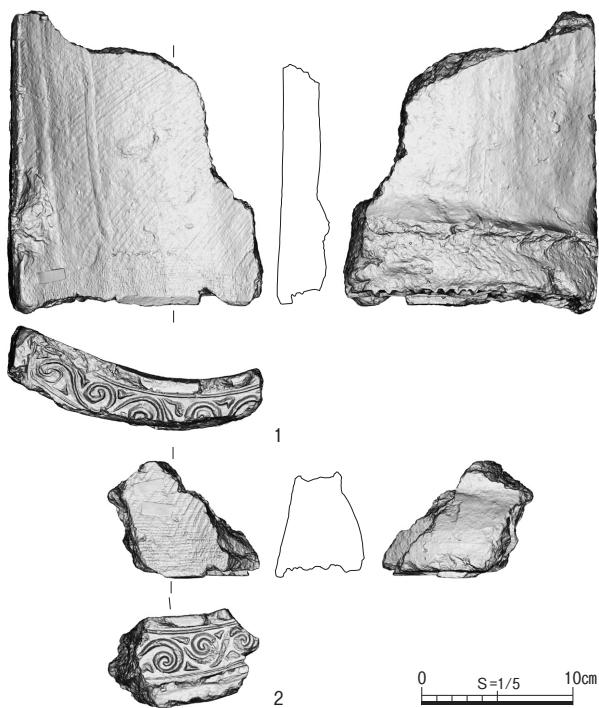


図14 781展開図



図15 785展開図

IV 軒平瓦の系統と年代

1 軒平瓦の技術系統

ここまで軒平瓦11型式の製作技術を検討してきたが（表1）、

基本的な成形・調整技法によってまとめることができるものを技術群として設定した。

(1) 技術群の設定

A群 (751) 粘土塊を成形時の素材とした凸面押圧技法に特徴づけられる。これは、一定の厚みが得られるたら切り出しの粘土板を用いずに、单一もしくは複数の粘土塊を手

表1 各型式における製作工程上の諸属性

瓦当 型式	一次成形		二次成形		一次調整		施文		二次調整		顎形態	型枠状 成形台	1~3次 出土 点数	1~3次 出土 割合(%)
	平瓦部	凸面 押圧	瓦当部	凸面①	凸面②	瓦当面 離れ砂	凸面 離れ砂	凹型台	瓦当 凹面					
751	塊	○	—	縦ヶ	×	×	×	×	横ナ・横ヶ	曲II	○	32	16	
752	板	×	凸貼付A	縦ヶ		×	×	×	横ヶ	曲I・ II/直	—	7	4	
755	板	×	凸貼付A	縦ヶ	平繩	×	×	×	横ヶ	曲II	—	4	2	
756	板	—	凸貼付A	縦ヶ	—	—	—	—	横ヶ	曲II	—	1	0.5	
761	板	×	—	縦ヶ	全繩	○/×	○/×	○	横ナ・横ヶ	曲I・ II	△	39	20	
763a	板	×	凸貼付A	縦ヶ	全繩 ×	○/×	×	○	横ヶ	曲I・ II/直	○			
763b	板	×	凸貼付A	縦ヶ	全繩 ×	○/×	×	○	横ヶ	曲I・ II/直	○	30	15	
764	板?	—	凸貼付A	縦ナ・ ヶ	×	○/×	×	×	横ナ・横ヶ (全面)	曲I/直	—	14	7	
771	板	×	凸貼付A	縦ヶ	全繩	○/×	○/×	×?	横ナ・横ヶ	曲I・ II/直	○	60	30	
781	板	×	凸貼付B	縦ナ	×	×	×	×	横ヶ	曲I	—	4	2	
783	板	×	—	縦ナ・ 縦ヶ	平繩	×	×	×	横ナ・ヶ	曲II	—	5	2	
785	—	—	—	—	縄?	×	○	×	横ヶ	直	—	1	0.5	

凡例:

【全般】

○：あり、△：可能性あり、×：なし、—：不明（判断不可）、太字ゴシック：複数あるなかで主体的なもの

【一次成形－平瓦部】

塊：粘土塊、板：粘土板

【一次調整－凸面】

縦ヶ：縦ヘラケズリ、縦ナ：縦ナデ

【二次成形－瓦当部】

凸貼付A：平瓦部と顎部粘土の剥離面が凹凸のある平坦面をなす

凸貼付B：平瓦部と顎部粘土の剥離面が明確な平坦面をなす

【二次調整－凸面】

×：二次調整なし。一次調整で凸面仕上げ、平繩：平瓦部のみ繩叩き、全繩：顎部～平瓦部にかけて全面繩叩き

【二次調整－瓦当凹面】

【顎形態】

横ナ：横ナデ、横ヶ：横ヶズリ

直：直線顎、曲I：曲線顎I、曲II：曲線顎II

で押圧して成形するものである¹⁴。凸面押圧技法は、造東大寺司所管の瓦工房で採用され、その後西大寺や平安京、東寺・西寺でも同技法による軒平瓦が生産・供給された。技法上の共通点から、山崎は造東大寺司もしくは造西寺司との関係を指摘している¹⁵。

B群（755・756・752・783） 凸面の平瓦部を中心に繩叩きする一群。1型式内における技術のまとめの程度から、B-1群とB-2群に細分する。

①B-1群（755・756）：安定した曲線顎IIで、凸面は平瓦部のみを繩叩きする。756は平瓦部の調整技法が不明だが、基本的に755と共通した技法である。

②B-2群（752・783）：平瓦部叩きのほか、全面叩きや叩きをおこなわずケズリで仕上げる例も存在する。安定した曲線顎II主体だが、ケズリ仕上げの一群は曲線顎Iや直線顎となる。

B群の平瓦部のみを繩叩きする点は、奈良～平安時代の大和において普遍的な技法といえる。B-1群は、後述する瓦当文様の特徴も考慮すると、平城宮・京の造瓦組織との関

連が想定できる。

C群 (761・763・771) 凸面全面を縄叩きで仕上げる一群。顎部の形状は曲線顎主体だが、個体差が大きく不安定である。また、凹型台の使用とそれに伴う凸面離れ砂が認められる。

D群 (764) 凹凸面ともにほぼ全面をナデで仕上げるもので、顎形態は曲線顎I。文様はC群の761・763と共に通の意匠を採用する一方で、製作技術は大きく異なる。

E群 (781) 凸面は叩きをおこなわず、全面ナデで仕上げる点と、凸面貼り付け成形Bという点が大きな特徴。E群は、顎形態、瓦当部成形法から見て平安時代後期における南都諸寺院系の技術系譜上にある。

F群 (785) 1型式のみで出土点数も寡少だが、直線顎と凸面離れ砂で明確な叩きがない点で特徴的。

(2) 特殊な造瓦道具に関する予察

型枠状凸型成形台の使用 A群 (751) と C群 (761・763・771)において縁辺に立ち上がりをもつ成形台の使用が認められた。この成形台は、型作りとの関連から、粘土塊成形と凸面押圧技法を採用するA群には必要な造瓦道具である。一方で、たたら切り出し粘土板を用いるC群には、技術上必須とはいえない。

ただし、平城宮・京においても狭端面に布目が残り、同様の構造の成形台が想定できる型式はあるものの、ほとんどは凸面押圧技法にともなうものである¹⁶。

凹型台の使用 C群において、凹型台とそれに伴う離れ砂の使用が認められた。この凹型台については、中世における軒平瓦づくりの特徴のひとつとして認識されている¹⁷。一方、古代における一般的な一枚づくり軒平瓦では、凹型台を使用せずに、範のついた瓦当面を下向きに立てるなどして凹面調整をおこなったと考えられる。

平安時代の大和においては、10世紀後半の薬師寺238で凸面に布目痕が残ることから凹型台の使用が想定されている¹⁸。ただし、C群のような明確に凹型台痕跡が残る事例はこれまで認められていない。

2 軒平瓦の文様系統

川原寺出土の平安期軒平瓦で、他遺跡と同文・同範関係が認められる型式は限られる。各事例を取り上げ、出土量などの比較から、川原寺を中心に流通したのか、それとも他地域・遺跡での消費が顕著なのか、予察をくわえる。なお川原寺以外の出土例では、実物の観察ができておらず、拓本や実測図、報告書の記述等をもとに検討したものも含まれる。

(1) 755・756と平城宮・平川廃寺

文様系統 755は、①↓形の垂飾りを上向きC字で囲う中心飾り、②外区が素文、③唐草の各单位が離れる、④唐草の第三単位が巻き込み、脇区と繋がらない、といった点で、

平城宮6702の系譜下にあることが明らかである。

他遺跡における類例 同文異範例は知られていないが、唐草の巻きをみると、6702G・H・Iのほか、山城・平川廃寺R-3に類似する¹⁹。特に平川廃寺R-3は、すべての唐草が内側に巻き込んでいる点で平城宮6702と一線を画すが、755も内巻きの唐草が主体となっており、共通点が見出せる。756は中心飾り部分のみの破片だが、6702 Iと同文異範である。なお、6702は平城宮瓦編年の第Ⅲ期を中心に展開し、6702G・H・Iは第Ⅲ期後半、天平勝宝元年（749）～天平宝字元年（757）に位置づけられる²⁰。

（2）751・752と加守廃寺・巨勢寺・坂田寺

文様系統 751・752はともに、中心飾りとしてC字を二つ並べる。左右の唐草が、各単位が離れた状態で4回反転する点も共通する。直接的な模倣・被模倣関係までは想定しがたいが、全体的な文様構成は共通するといえる。

他遺跡における同範例 751の同範例は豊浦寺で1点のみ出土している²¹。752の同範例は加守廃寺、巨勢寺（27）、坂田寺（121A）で確認できる²²。巨勢寺では6点出土している。

（3）761・763・764・771と飛鳥寺・飛鳥池遺跡・坂田寺

文様系統 761・763・764は、外区に珠文と×文を交互に配する意匠が共通する。ただし内区文様の唐草の展開は大きく異なり、模倣・被模倣の関係は想定できない。771は、文様は異なるものの、技術的には761・763と同じC群に含まれる。

他遺跡における同範例 このうち763bの同範例が飛鳥寺や飛鳥池遺跡、坂田寺（123A）で出土している²³。なお、東京国立博物館所蔵の興福寺採集資料にも763aと同範らしきものがあるが、発掘調査では出土していない²⁴。771aも坂田寺（125A）に同範例がある²⁵。

（4）781と南都七大寺・平安京

他遺跡における同文異範例 781は南都七大寺に類似した瓦が認められる。薬師寺（278）や元興寺、興福寺、西大寺（268A）などに同文異範例があり、このうち薬師寺278は元興寺、興福寺と同範である²⁶。ほか京都・法金剛院でも同文例が出土している²⁷。同範関係は認められないものの、技術的にも南都七大寺の瓦工人の影響は明らかである。

3 軒平瓦からみた平安時代における川原寺の造瓦

はじめに述べたように、川原寺は延久2年（1070）以前と、建久2年（1191）ごろに被災したことが文献から明らかである。今回検討した瓦は、二度目の被災以前のものであり、一度目の被災後の再建にともなって供給されたものが主体になるだろう。

これまで検討してきた文様・技術と他遺跡での類例、そして出土点数をもとに、おおまかな年代観を示す（表2）。ただし、今後の検討によって訂正の余地があることを予め付記しておく。

表2 技術群の分類と編年

瓦当型式	技術群	粘土素材	成形・調整技法	凹型台	凸面離れ砂	顎形態	学報の年代観	本稿の年代観
751	A	粘土塊	押圧	×	×	曲II	平安前期	
755	B-1	粘土板	平叩き	×	×	曲II	平安前期	
756							奈良後期～平安前期	I期
752	B-2	粘土板	平～全叩き	×	×	曲II主体	平安前期	
783							平安後期	
771	C	粘土板	全叩き	○	○	曲I主体	平安後期	
761							平安後期	
763							平安後期	
764	D	粘土板	叩きナシ	×	×	曲I主体	平安後期	
781	E	粘土板	叩きナシ	×	×	曲II	平安後期	
785	F	?	叩きナシ	—	○	直	平安後期	III期

なお、学報で平安時代の瓦が前期と後期に大別されていることは先述の通りである。前期は、751のほか752、755、765をあげ、756は平城宮との類似性から、奈良時代後期までさかのぼる可能性も想定されている。後期は、外区に珠文と×を交互に配する一群（761、763、764）やその他別系統のもの（771、781、783、785など）をあてているようである²⁸。

（1）I期：奈良時代後半～平安時代前期（8世紀後半～9世紀）

A・B群をI期にあてた。その中でも最も早い段階に位置づけられそうのが、B-1群（755・756）である。平城宮6702が粗型となるのは疑いなく、上限を8世紀後半としている。ただし、川原寺では平城宮・京と同範の瓦が出土しており、奈良時代において平城宮・京から供給を受けていたことを踏まえると、平城宮・京とは異範のB-1群が平安時代まで降る可能性も考慮すべきだろう。B-1群は5点（2.5%）出土したのみであり、補修・再建時に補足的に供給されたものだろう。

A群（751）は凸面押圧技法であることから、年代は少なくとも8世紀後半以降となる。ただし、文様は明らかに東大寺や西大寺、平城宮・京のものとは別系統である。対向C字形の中心飾は、むしろ9世紀に平安京や法隆寺などで採用されるものであり、751も9世紀まで降る可能性が高い。A群は1型式のみながら32点（16%）出土しており、一定規模の補修に際して主体的に用いられた可能性がある。

B-2群（752・783）もA群に近接した時期と考えられる。752は751と文様上の共通性が高く、752と783は技法上の共通点が多い。また、加守廃寺では創建期の興福寺式軒丸瓦の範が伝世し、平安前期に752とセットで使用されたことが指摘されている²⁹。B-2群は計12点（6%）出土したのみである。

（2）II期：平安時代中期（10世紀）

C（764）・D群（761・763・771）をII期にあてた。外区文様が珠文と×文、もしくは全面縄叩きの一群。顎形態や瓦当面形状は個体差が大きく、叩き具や調整技法も粗雑である

ことから、Ⅰ期よりも時期的に降ると考えられる。文様・技術の共通性から、C・D群は近接した時期のものである可能性が高い。なお、C群は14点（7%）、D群は129点（65%）あり、特にD群は平安時代軒瓦のなかで圧倒的多数を占める。これらの軒瓦が生産されたⅡ期に、大規模な再建事業がおこなわれた可能性が高い。ただし、川原寺裏山遺跡出土遺物が被災した火災後の再建に対応するものか否かは、より詳細な検討を要する。

（3）Ⅲ期：平安時代後期（11世紀末～12世紀）

E（781）、F群（785）をⅢ期にあてた。E群は南都七大寺系のものであり、同文異範例の年代観から11世紀末ごろとみてよいだろう。F群は類例に乏しいが、宝塔文軒丸瓦と組み合う可能性がある³⁰。宝塔文軒丸瓦は特に和泉国内での出土が顕著であり、その多くは12世紀代に位置づけられる³¹。和泉産の瓦は和泉国外への流通も認められ、F群も大和産だけでなく和泉産の可能性も考慮しながら比較検討を進める必要がある。

なお、E群は4点（2%）、F群は1点（0.5%）出土しているに過ぎず、小規模な補修にともなう補足瓦であろう。

V おわりに

本稿では、川原寺における平安時代の軒平瓦を対象に、瓦当文様・製作技術の再検討をおこなった。その結果、従来未確認だった改範の状況を明らかにしたほか、各型式を6グループに分類し、3期に編年した。そのうち、Ⅰ期の瓦群は主に東大寺や平城宮の造瓦組織の系譜下に位置づけられる。一方で、再建時の主要瓦と考えられるⅡ期の瓦群は、文様・技法とともに極めて独自色の強いものであった。Ⅰ～Ⅱ期の瓦群は南都七大寺や平安京での出土も確認できず、川原寺を中心に飛鳥地域を中心に限定的に生産・流通したものであることを明らかにした。そしてⅢ期の瓦群は、南都七大寺や和泉との関連も想定され、南都七大寺を中心とした瓦生産・流通体制の中に組み込まれたと評価できる。

今回の分析を通じて、平安時代のなかでも供給元の造瓦組織や造瓦技術が時期によって変化することが解明できたのは重要な成果である。今後の課題としては、軒平瓦とどの軒丸瓦がセットで生産・供給されたのかを明らかにするとともに、他遺跡の平安期軒瓦との比較検討も進め、平安時代の大和国内における瓦の生産・流通体制の具体相を解明することが求められる。

本稿は、令和3～4年度日本学術振興会科学研究費助成事業研究活動スタート支援（課題番号21K20062）の成果の一部である。

註

- 1 『近江国弘福寺領莊田注進状』。
- 2 『玉葉』建久2年5月2日条。
- 3 奈良文化財研究所 2004 『川原寺寺域北限の調査—飛鳥藤原第119-5次発掘調査報告』。
- 4 奈良国立文化財研究所 1960 『川原寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第9冊。いっぽう軒丸瓦に関しては、創建瓦601の230点に比して平安時代は55点と多くはないものの、一定量出土している。
- 5 前掲註4 奈文研1960。ただし、学報の型式分類は必ずしも範の異同に基づく分類ではない。たとえば、601はA～E種の5種に細分され、C種とD種は瓦当裏面調整の違いが分類基準となっていたが、両者は同範である（金子裕之 1983「軒瓦製作技法に関する二、三の問題—川原寺の軒丸瓦を中心として—」『文化財論叢I』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集 pp.269-285）。
- 6 花谷浩 2000「京内廿四寺について」『研究論集XI』奈良国立文化財研究所学報第60冊 奈良国立文化財研究所 pp.77-202。
- 7 花谷浩 2021「瓦塼類」『飛鳥池遺跡発掘調査報告 本文編〔I〕一生産工房関係遺物一』奈良文化財研究所学報第71冊 奈良文化財研究所 pp.225-484。
- 8 山崎信二 1980「大和における平安時代の瓦生産」『研究論集VI』 奈良国立文化財研究所 pp.131-177。
山崎信二 2003「大和における平安時代の瓦生産（再論）」『古代瓦と横穴式石室の研究』 同成社 pp.179-246。
山崎信二 2011『古代造瓦史』雄山閣。
- 9 なお、川原寺の平安時代の軒瓦は3桁目が7となる型式番号が振られているが、782は奈良時代のものとして今回は扱わない。782は平城薬師寺と山田寺で同範品が確認され、平城宮6703Aの型式番号が設定されている。
奈良国立文化財研究所 1987『薬師寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第45冊。
奈良国立文化財研究所 1996『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』。
奈良文化財研究所 2002『山田寺発掘調査報告』奈良文化財研究所学報第63冊。
- 10 3次元モデルの作成には、Agisoft Metashape Professionalを使用した。画像データの書き出しには、CloudCompare (v2.12.1) を使用した。3次元モデルによる同範認識に関する研究としては、次の論考に詳しい。中村亜希子・今井晃樹・林正憲・岩永玲 2022「「瓦様」と瓦範—東大寺式軒丸瓦における同紋瓦・同範瓦の再検討—」『奈文研論叢』第3号 pp. 1-37。
- 11 前掲註7 花谷2021。
- 12 前掲註4 奈良国立文化財研究所1960、PL.46-40。
- 13 瓦づくりにおける「たら」とは、粘土板を切り出すために整えた直方体の粘土塊のことを指す（竹中大工道具館 2017『千年の甍 古代瓦を葺く』）。なお「たら切り出し」という用語については、以下の文献で既に用いられている。
木村理 2020「篠窯跡群における瓦生産の展開—西山1号窯出土の平瓦を中心に—」『摂関期の瓦陶兼業窯をめぐる多面的研究—丹波・篠窯跡群を主な対象に—』 大阪大学大学院文学研究科考古学研究室 pp.261-280。
- 14 「凸面押圧技法」自体には、成形時の素材が粘土塊であるという意味は含まれていない（小澤毅 1990「西大寺の創建及び復興期の瓦」『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』 奈良県

教育委員会・奈良国立文化財研究所 pp.152-168。毛利光俊彦・花谷浩 1991「屋瓦」『平城宮発掘調査報告XIII』奈良国立文化財研究所学報第50冊 奈良国立文化財研究所 pp.251-369)。ただし、粘土塊を成形時に用いる時点で凸面の押圧成形は必須であり、凸面押圧技法と粘土塊は技術的に強く結びついたものといえる。

- 15 前掲註8 山崎2003。
- 16 前掲註14 毛利光・花谷1991。
- 17 山崎信二 2000『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所学報第59冊 奈良国立文化財研究所。
- 18 前掲註9 奈文研1987。
前掲註8 山崎2003。
- 19 藤田智子 2001「平川廃寺の軒瓦の展開—龍谷大学調査資料を中心として—」『帝塚山大学考古学研究所研究報告Ⅲ』 帝塚山大学考古学研究所 pp.75-106
- 20 前掲註14 毛利光・花谷1991。
- 21 奈良国立文化財研究所 1986「豊浦寺第3次調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報16』 pp.57-67
- 22 奈良県立橿原考古学研究所 1993「加守寺跡第1・2次」『奈良県遺跡発掘調査概報1992年度』第2分冊、pp.1-12。
奈良県立橿原考古学研究所 2004『巨勢寺』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第87冊。
奈良国立文化財研究所 1992「坂田寺第7次調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報22』 pp.64-82。
近江俊秀 1997「加守廃寺の発掘調査」『佛教藝術』235号、佛教藝術學會、pp.98-104。
- 23 奈良国立文化財研究所 1997「飛鳥寺の調査—1996-1・3次、第84次」『奈良国立文化財研究所年報1997-II』 pp.44-56。
前掲註7 花谷2021。
前掲註22 奈文研1992。
- 24 蔽中五百樹 2004「興福寺と荒池瓦窯の瓦」『MUSEUM』第593号 pp. 5-40。
- 25 前掲註22 奈文研1992。
- 26 前掲註9 奈文研1987。
奈良文化財研究所 2012『興福寺 第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報VI』。
奈良県教育委員会・奈良国立文化財研究所 1990『西大寺防災施設工事・発掘調査報告』。
- 27 上村和直 2002「御室地域における造営と瓦—平安時代後期を中心として—」『田辺昭三先生古稀記念論文集』 田辺昭三先生古稀記念の会 pp.505-518
- 28 前掲註4 奈文研1960。
- 29 前掲註22 近江1997。
山崎信二 2002「中世瓦の年代細分と古代瓦・近世瓦との相違」『シンポジウム 中世瓦の研究』 pp.41-48
前掲註11 山崎2003。
- 30 前掲註9 花谷2000、第40図12、p.149で宝塔文軒丸瓦の拓影が掲載されている。
- 31 市本芳三 1995「日置莊遺跡出土瓦の分析」『日置莊遺跡 分析・考察編』 大阪府教育委員会・大阪文化財センター pp.53-86。
近藤康司 2019「摂津・河内・和泉」『中世瓦の考古学』 高志書院 pp.203-218。

挿図出典

いずれも筆著作成